

カール・レーヴィット

- 仙台ゆかりの哲学者の遺品 -

(柴田治三郎文書)

戦後の東北大学でドイツ文学の教授を務めた柴田 治三郎(しばた・じさぶろう 1909~1998)の旧蔵文書のうち、今回追加整理した中には、親交のあった哲学者、カール・レーヴィット(Karl Löwith 1897~1973)関係資料が18点含まれています。

レーヴィットはドイツの哲学者で、初期はハイデッガーの強い影響下にありましたが、後には歴史哲学の立場からキリスト教哲学の見直しを進めました。ユダヤ系であったため、ナチス支配の進むドイツで迫害を受け、亡命先として選ばれたのが仙台でした。九鬼周造の仲介により、彼は1936年(昭和11)から東北帝国大学の外国人教師として哲学とドイツ文学を担当し、河野 與一(こうの・よいち 当時、法文学部の助教授)らと親交を結びました。ところが第二次世界大戦が勃発すると、日本が枢軸国に加わったため、ついに1941年(昭和16)にアメリカに渡ります。戦後は、1952年にドイツに帰国し、ハイデルベルク大学教授を勤め、亡くなるまで同地で過ごしました。日本で教鞭をとったこともあり、いくつもの翻訳が刊行されています。

今回の展示では、レーヴィット本人や夫人の書簡に加え、親交のあった河野 與一の書簡、さらに彼が使用していたと伝えられる衣類をご覧にいたします。



レーヴィット(45歳)



レーヴィット旧蔵のジャケット(左)とスパッツ(右)